

夷鳥命八岐ノ大蛇ノ尾ヨリ、其劔ヲ取出シ給フ、大蛇ハ伊吹大明神也ト云云、其後日本武尊、此山ノ麓ヲ通ラセ給フ時、天叢雲ノ劔ヲ帶セ給フ處、大蛇ノ祟リニ逢給ヒ、千々ノ松原ニ崩御也、嶺ニ池水有テ、風水龍王在ト云、是大明神ナルヤ、石ヲ積テ彌勒佛在ス、此奉○智誤奉恐證大師ノ開基共云、又飛行上人開基共云、故ニ飛行上人奏シテ、伊布貴大明神ニ正一位ヲ授ケ、額ヲ勅下也ト云、
(日本書紀景行)四十年十月、於是聞近江膽吹山有荒神、即解劔置於宮簾媛家而徒行之、至膽吹山、山神化大蛇當道、爰日本武尊、不知主神化蛇之謂是大蛇必荒神之使也、既得殺主神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行、時山神之興雲零水、峯霧谷礪、無復可行之路、乃接遑不知其所跋涉、然凌霧强行、方僅得出、猶失意如醉、

古事記傳二十八此山は近江國と美濃國との境に在て、濃は不破郡の坂田郡、東は美神名帳に近江國坂田郡伊夫伎神社、美濃國不破郡伊富岐神社あり、今坂田郡にも不破郡伊吹村と云あり、三代實錄三十三に詔以近江國坂田郡伊吹山護國寺列定額沙門三修申牒稱云々此山即是七高山之其一也、云云、藤原武智麻呂公傳と云物に徒爲近江守云々、於是因按行至坂田郡、寓目山川曰、吾欲上伊福山頂瞻望、土人曰、入此山、疾風雷雨、雲霧晦冥、群蜂飛舞、昔倭武皇子、調伏東國、龐惡鬼神、歸到此界、仍卽登也、登欲半爲神所害、變爲白鳥、飛空而去也、公曰云々、率五六十人、披蒙籠而登、行間忽有雨、飛來欲螫、公揚袂而掃隨手退歸、從者皆曰、德行感神、敢無被害者、終日優游佛僧、瞻望風雨共靜、天氣清晴、此公勢力之所致也、と云り、此は僧の作れる書にて、例の信がたきこと多し、源平盛衰記に寶劍の由來を云る處に云、素盡鳴尊、即天照大神の書にて奉る、大神大に悦びまし、て、吾天岩戸に閉籠りととき、近江國膽吹が嶽に落たりし劔なりとぞ仰せける、彼大蛇と云は、膽吹大明神の法體なり云々と云り、さて伊服伎と云名の義は、山の神毒氣を吹よしなりと云は、下野國なりと顯昭が袖中抄にも見え、契沖も清少納言が草子にまことや下野へ下ると云うける人に思ひだにか、らぬ山のさせも草たれかいぶきの曾禰好忠歌、冬深く野はなりにけさとは告しそともあれ、下野國なること必定なりと云り、曾禰好忠歌、冬深く野はなりにけり近江なる伊吹のとやま雪ふりぬらし、續古今集に入れり

三代實錄三十三元慶二年二月十三日己卯、詔以近江國坂田郡伊吹山護國寺列於定額沙門三修申牒稱少年之時、落髮入道、脚歷名山莫不周盡、仁壽年中登到此山、即是七高山之其一也、觀其形勢、